

大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題 (3)

— 「特別支援教育の基礎」 対面講義とオンデマンド講義の比較 —

大 杉 成 喜

要旨：令和3年も日本の大学では新型コロナウイルス（COVID-19）流行防止の観点から対面講義とオンライン講義の併用が続けられた。本学でも受講者の多い講義は感染予防の観点から、広い記念講堂での講義またはインターネットによるオンデマンド講義を実施することとなった。著者が担当する教育学部「特別支援教育の基礎（初等）」は講堂での対面講義、文学部「特別支援教育の基礎（中等）」はオンデマンド講義を行うこととなった。両講義の講義前と13回目の講義終了時に実施したアンケートの発達障害に関する知識・理解の平均点を比較したところ、講義前は対面講義（M13.28, SD2.24）、オンデマンド講義（M13.07, SD2.20）と差がなかった。しかし、講義終了時のオンデマンド講義の受講者の平均点（M13.51, SD2.73）は向上せず、対面講義（M15.26, SD2.57）に比べて有意に低かった。オンデマンド講義ではその人のものの捉え方や考え方を大きく変えることは難しいことが示唆された。

キーワード：特別支援教育 対面講義 オンデマンド講義 COVID-19

I. 問題と目的

「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成29年文部科学省令第41号）」により、教員免許状取得を希望する者は「特別支援教育に関する科目」の単位取得が必要となった。

本学教育学部では平成26年度より「特別支援教育の基礎」（本稿では中等との区別のため「特別支援教育の基礎（初等）」と記述する）を卒業必修単位としてきた。その後の教育職員免許法施行規則の改定に伴い、平成31年度入学生より中学校・高等学校教員免許状取得を希望する教育学部以外の学生についても、教職必修科目として「特別支援教育の基礎（中等）」を開設した。これは、中学校・高等学校等の通常の学級の教員となる学生を対象に特別支援教育に関する知識・理解・態度を身につけさせる講義として設定したものである。

この「特別支援教育の基礎（初等）」と「特別支援教育の基礎（中等）」の両方の講義担当である筆者は、特別支援教育の基礎的な知識理解に関する内容を共通とし、小学校と、中学校・高等学校それぞれにおける特別支援教育に関する内容を加えたシラバスを作成し、文部科学省の再課程認

定を受けた。

表1、表2に「特別支援教育の基礎（初等）」と「特別支援教育の基礎（中等）」の15回の講義内容を示す。特別支援教育に関する基礎的な知識・理解を深める内容、とりわけ各自治体が発行する教員採用選考試験でよく出題されている内容を共通事項とし、「特別支援教育の基礎（初等）」では幼児期から小学校段階の本人・保護者・学校での対応について重点を、「特別支援教育の基礎（中等）」では中学校・高等学校段階の本人の障害認知や進路選択、学校・社会の対応について重点を置いた内容を加えた。「特別支援教育の基礎（初等）」では人工呼吸器を使用するALS当事者である歯科医師にゲストスピーカーを依頼し、障害の重い人の生活と自己実現についてご講義いただいた。「特別支援教育の基礎（中等）」では医療少年院の法務教官と通級指導教室のある高等学校教頭にゲストスピーカーを依頼し、発達障害のある少年の様々な問題と支援についてご講義いただいた。

令和2年に始まった新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な流行により、平成3年度も社会活動制限が続いた。本学では、春学期の「特別支援教育の基礎（初等）」は記念講堂での対面講義、秋学期の「特別支援教育の基礎（中等）」はmanaba

表1 「特別支援教育の基礎(初等)」の講義内容(令和3年度春学期教育学部対面講義)

第1回:オリエンテーション
第2回:国際障害観の変遷と障害者の権利条約, インクルーシブ教育
第3回:障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律と学校教育, 基礎的環境整備と合理的配慮
第4回:特別支援教育の歴史, 自立活動とは, 矯正教育等広義の特別支援教育
第5回:幼・小・中・高等学校における特別支援教育, 通級による指導
第6回:特別支援学級における教育
第7回:特別支援学校における教育(視覚・聴覚・知的障害, 肢体不自由, 病弱等の障害の重い子ども)
第8回:発達障害とは
第9回:自閉症スペクトラム障害のある子どもの理解と基本的対応, ゲストスピーカーの講義(録画)
第10回:ADHDのある子どもの理解と基本的対応について
第11回:LDのある子供の理解と基本的対応
第12回:発達障害児への基本的対応, 通級指導教室の指導と在籍学級の連携
第13回:授業のユニバーサルデザイン化
第14回:外国語を母国語とする児童生徒の支援
第15回:まとめ 様々な特別な教育ニーズのある子供の支援, 三重県校長及び教員としての資質の向上に関する指標

(皇學館大学シラバス, 2021)

表2 「特別支援教育の基礎(中等)」の講義内容(令和3年度秋学期文学部オンデマンド講義)

第1回:オリエンテーション
第2回:国際障害観の変遷と障害者の権利条約, インクルーシブ教育
第3回:障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律と学校教育, 基礎的環境整備と合理的配慮
第4回:特別支援教育の歴史, 自立活動とは, 矯正教育等広義の特別支援教育
第5回:幼・小・中・高等学校における特別支援教育, 個別的教育支援計画と個別の指導計画, 校内体制と特別支援教育コーディネーター
第6回:特別支援学級における教育
第7回:特別支援学校における教育(視覚・聴覚・知的障害, 肢体不自由, 病弱等の障害の重い子供)
第8回:矯正教育と特殊教育課程, ゲストスピーカーの講義(法務教官)
第9回:高等学校の特別支援教育, ゲストスピーカーの講義(高等学校教頭)
第10回:発達障害とは
第11回:自閉症のある生徒の理解と基本的対応
第12回:ADHDのある生徒の理解と基本的対応について
第13回:LDのある生徒の理解と基本的対応
第14回:様々な特別な教育ニーズのある生徒への切れ目のない支援 外国語を母国語とする児童生徒の支援
第15回:まとめ 様々な特別な教育ニーズのある生徒の支援, 三重県校長及び教員としての資質の向上に関する指標

(皇學館大学シラバス, 2021)

cours (LMS: Learning Management System, 学習管理システム)によるオンデマンド講義を行うこととなった。

著者は「大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(2) - 対面授業とオンデマンド授業の比較 -」(大杉, 2021)において, オンデマンド講義(令和2年度)は内容を工夫することによって, 対面講義(令和元年度)との期末試験の成績に差はみられなかったことを報告した。オンデマンド講義は, 対面講義の数倍の手間と時間をかけて作成する必要があるが, 対面授業の品質と学

力保障は可能であると考えられる。

一方で, オンデマンド講義は授業で学んだことを受講者同士で議論する機会は少ない。もちろん, オンデマンド講義においても, レポートに対する返答等により, 受講者とやりとりすることは可能ではある。「特別支援教育の基礎(中等)」においても講義後のレポートを受けてのゲストスピーカーの返答は受講者に好評であった。しかし, 著者はオンデマンド講義のレポートの中で, 受講者に講義の意図が十分伝わっていないのではないかと感じることもあった。試験で問われる知

識はついているが、発達障害に対する捉え方や考え方についてはあまり変化していないのではないかと感じることもあった。

そこで、本稿では著者が担当した対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」とオンデマンド授業「特別支援教育の基礎(中等)」の受講学生の講義開始時、終了前のアンケート調査をもとに発達障害に関する知識・理解の変容について比較検討する。

II. 方法

1. 調査対象者

春学期(令和3年度前期)開設の「特別支援教育の基礎(初等)」の履修登録者のうち4月実施の講義開始前アンケートと7月実施の講義終了時アンケートの両方に回答した2年生学生223名。秋学期(令和3年度後期)開設の「特別支援教育の基礎(中等)」の履修登録者のうち9月実施の講義開始前アンケートと12月実施の講義終了時アンケートの両方に回答した2年生学生82名。このうち春学期も受講した16名は除いている。

2. 方法

(1) 講義開始前の発達障害に関する知識の調査

講義開始前に受講者の発達障害に関する知識の調査を行った。これまでの比較研究「大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1)－教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して－」(大杉,2020)、「大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(2)－対面授業とオンデマンド授業の比較－」(大杉,2021)同様、菊池(2011)をもとに調査項目を構成したものを使用した。

アンケート調査は、春学期の特別支援教育の基礎(教育学部)(記念講堂・対面講義)では第1回(4月16日)講義の最初に、秋学期の特別支援教育の基礎(中等)(オンデマンド講義)ではmanaba courseのアンケート機能を利用し、第1回(9月20日配信開始)の講義の中で回答場面を設けた。アンケートはあくまで調査であり、成績とは関係ないので考えたとおりに選択するように伝

えた。春学期は授業開始時の質問紙による一斉実施であるが、秋学期はmanaba courseはアンケート機能を使用したため回答時間や場所には個人差がある。

(2) 講義終了時の発達障害に関する知識の調査

講義開始前アンケート調査と同様のものを、春学期の「特別支援教育の基礎(初等)」(記念講堂・対面講義)では第14回(7月16日)の講義の最初に、秋学期の「特別支援教育の基礎(中等)」(オンデマンド講義)ではmanaba courseのアンケート機能を利用し第13回(12月20日配信開始)の講義の中で回答場面を設けた。

(3) 調査の説明とフィードバック

調査に先立って以下のような説明を行い、協力を求めた。あくまで授業改善のための資料収集が目的で、個人の成績評価とは関係ないことを確認した。

本調査は、「特別支援教育の基礎」の講義を進めるに当たって、受講生の皆さんが特別支援教育について、どの程度の知識を持っているか、また通常学級に在籍する発達障害のある子供に対してどのようなイメージを持っているのかについて資料を収集するためのものです。

発達障害とは、自閉症・アスペルガー症候群(ASD:自閉症スペクトラム障害)、LD(学習障害)、ADHD(注意欠如多動性障害、「AD/HD:注意欠陥・多動性障害」とも表記)などの障害を指します。これらの障害に対する皆さんの現時点での理解やイメージを調査することで、これからの授業に活かしていきたいと思っております。

この結果で成績評価がなされるようなことはありません。自分が実際に感じたままをお答えください。

また、この講義開始時のアンケートの結果は、「特別支援教育の基礎(初等)」では第9回(6月11日)の講義の中で、「特別支援教育の基礎(中等)」では第10回(11月29日)のオンデマンド講義の中で正解と集計結果の報告とその解説を行った。

Ⅲ. 結果

1. 講義開始前の発達障害に関する知識の比較

令和3年度の春学期・秋学期の講義開始前アンケートの発達障害に関する知識に関する調査の得点について1要因の分散分析を行った結果、各年度の正答総数(20問中)について有意差は見られなかった($F(1,146.665)=0.538, p=.464$).

また、春学期(対面講義・教育学部)・秋学期(オンデマンド講義・文学部)の各項目の正答数・誤答数について独立性の検定を行ったところ、3項目において有意差が見られた(表3)。秋学期の正答数が春学期の正答数に対して5%水準で有意に多いのは、「5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある(アスペルガー症候群の定義)」(秋学期・文学部の正答率39.0%で、春学期・教育学部の27.4%に対して有意に多い)、「8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である(自閉症のコミュニケーション)」(秋学期・文学部の正答率48.8%、春学期・教育学部の36.3%に対して有意に多い)の2項目であった。一方、春学期の正答数が秋学期の正答数に対して5%水準で有意に多いのは、「19) LDとは、書字と読字のみに障害を持つものである(LDの定義)」(春学期・教育学部の正答率84.8%、秋学期・文学部の67.41%に対して有意に多い)の1項目であった。

2. 講義終了時の発達障害に関する知識の比較

令和3年度の春学期・秋学期の講義終了時アンケートの発達障害に関する知識に関する調査の得点について1要因の分散分析を行った結果、授業の形態(対面講義かオンデマンド講義か)の主効果が有意となった($F(1,136.797)=25.350, p=.000$)。対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」の得点がオンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」の得点に対して有意に高かった。

3. 対面講義開始時と終了時の発達障害に関する知識の定着

(1) 総得点の比較

対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」(春学期・教育学部・有効回答数223名)の発達障害に関する知識・理解に関するアンケートについて開始時と終了時の総得点(20問)に対して、対応のあるt検定を行ったところ、終了時の総得点は($M=15.26, SD=2.57$)が開始時の総得点($M=13.28, SD=2.24$)よりも有意に高かった($t(222)=10.450, p=.000$)(表4)。

対面講義開始時と終了時の総得点のヒストグラムを図1に示す。対面講義開始時は14点が最も多く、16点以上は少ない。終了時は16点が最も多く、20点満点が12名見られる。

(2) 各設問の得点の比較

対面講義について講義開始時、終了時の発達障害の知識に関するアンケートの各項目の正答数・誤答数について独立性の検定を行ったところ、12項目において有意差が見られた(表4)。

講義開始時の正答数が開始時の正答数に対して5%水準で有意に多いのは、「1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す(自閉症のコミュニケーション)」(講義終了時の正答率55.2%、開始時の43.9%に対して有意に多い)、「2) ADHDは、親の育て方など生後の環境により発症するものである(ADHDの原因)」(講義終了時の正答率91.0%、開始時の67.7%に対して有意に多い)、「3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる(発達障害の特徴)」(講義終了時の正答率99.1%、開始時の91.9%に対して有意に多い)、「4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である(LDと知的障害)」(講義終了時の正答率61.3%、開始時の35.0%に対して有意に多い)、「5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある(アスペルガー症候群の定義)」(講義終了時の正答率49.8%、開始時の27.4%に対して有意に多い)、「6) ADHD児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである(ADHDと反抗

表3：オリエンテーション時・オンデマンド授業開始前の2年生学生の発達障害に関する知識

	初等 (春学期・教育学部)		中等 (秋学期・文学部)		
	回答者数	正答数 (20問中)の平均	SD	正答数 (20問中)の平均	SD
	223	13.28	2.24	82	13.07
				2.20	
設問	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率	
1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す(自閉症のコミュニケーション)	98 125	43.9%	30 52	36.6%	
2) ADHDは、親の育て方など生後の環境により発症するものである(ADHDの原因)	151 72	67.7%	57 25	69.5%	
3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる(発達障害の特徴)	205 18	91.9%	76 6	92.7%	
4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である(LDと知的障害)	78 145	35.0%	31 51	37.8%	
5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある(アスペルガー症候群の定義)	61 162	▽ ▲ 27.4%	32 50	▲ ▽ 39.0%	
6) ADHD児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである(ADHDと反抗的側面)	178 45	79.8%	68 14	82.9%	
7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい(発達障害の特徴)	186 37	83.4%	71 11	86.6%	
8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である(自閉症のコミュニケーション)	81 142	▽ ▲ 36.3%	40 42	▲ ▽ 48.8%	
9) ADHDは必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ(ADHDの定義)	151 72	67.7%	59 23	72.0%	
10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである(自閉症の原因)	138 85	61.9%	46 36	56.1%	
11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい(発達障害と犯罪)	141 82	63.2%	55 27	67.1%	
12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある(アスペルガー症候群と社会性)	185 38	83.0%	70 12	85.4%	
13) ADHD児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる(ADHDの症状)	194 29	87.0%	72 10	87.8%	
14) LD児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない(LDと身体運動)	168 55	75.3%	61 21	74.4%	
15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない(発達障害の本人自覚)	89 134	39.9%	43 39	52.4%	
16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている(自閉症と知的障害)	125 98	56.1%	53 29	64.6%	
17) LDの原因は、脳機能の障害である(LDの原因)	162 61	72.6%	61 21	74.4%	
18) ADHD児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするのは、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い(ADHDの行動の原因)	171 52	76.7%	57 25	69.5%	
19) LDとは、書字と読字のみに障害を持つものである(LDの定義)	189 34	▲ ▽ 84.8%	55 27	▽ ▲ 67.1%	
20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれないこともある(大人の発達障害)	211 12	94.6%	78 4	95.1%	

※重複履修者のデータを除く。

(▲有意に多い、▽有意に少ない、 $p < .05$)

的側面)」(講義終了時の正答率91.9%, 開始時の79.8%に対して有意に多い), 「9) ADHDは必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ(ADHDの定義)」(講義終了時の正答率80.3%, 開始時の67.7%に対して有意に多い), 「10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである(自閉症の原因)」(講義終了時の正答率88.3%, 開始時の61.9%に対して有意に多い), 「11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい(発達障害と犯罪)」(講義終了時の正答率72.2%, 開始時の63.2%に対して有意に多い), 「13) ADHD児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる(ADHDの症状)」(講義終了時の正答率93.7%, 開始時の87.0%に対して有意に多い), 「15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない(発達障害の本人自覚)」(講義終了時の正答率78.0%, 開始時の39.9%に対して有意に多い), 「16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている(自閉症と知的障害)」(講義終了時の正答率67.3%, 開始時の56.1%に対して有意に多い)である。

4. オンデマンド講義開始時と終了時の発達障害に関する知識の定着

(1) 総得点の比較

オンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」(秋学期・文学部・有効回答数82名)の発達障害に関する知識・理解に関するアンケートについて、開始時と終了時の総得点(20問)に対して、対応のあるt検定を行ったところ、終了時の総得点は(M=13.51, SD=2.73)であり、開始時の総得点(M=13.07, SD=2.20)との有意差は認められなかった(t(81)=1.390, p=.168)(表4)。

オンデマンド講義開始時と終了時の総得点のヒストグラムを図2に示す。講義開始時は13点が最も多く、終了時は14点、15点が多い。20点満点はなかった。

(2) 各得点の比較

オンデマンド講義について講義開始時、終了時の発達障害の知識に関するアンケートの各項目

表4: 対面講義開始前と終了時の教育学部2年生学生の発達障害に関する知識・理解の変化

設問	講義開始前 (教育学部)		講義終了時 (教育学部)	
	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率
回答者数	223		223	
20問中の正答数平均	13.28		15.26	
SD	2.24		2.57	
1) 自閉症のコミュニケーション	98 125	▽ ▲ 43.9%	123 100	▲ ▽ 55.2%
2) ADHDの原因	151 72	▽ ▲ 67.7%	203 20	▲ ▽ 91.0%
3) 発達障害の特徴	205 18	▽ ▲ 91.9%	221 2	▲ ▽ 99.1%
4) LDと知的障害	78 145	▽ ▲ 35.0%	136 86	▲ ▽ 61.3%
5) アスペルガー症候群の定義	61 162	▽ ▲ 27.4%	111 112	▲ ▽ 49.8%
6) ADHDと反抗的側面	178 45	▽ ▲ 79.8%	205 18	▲ ▽ 91.9%
7) 発達障害の特徴	186 37	▽ ▲ 83.4%	198 25	▲ ▽ 88.8%
8) 自閉症のコミュニケーション	81 142	▽ ▲ 36.3%	72 151	▲ ▽ 32.3%
9) ADHDの定義	151 72	▽ ▲ 67.7%	179 44	▲ ▽ 80.3%
10) 自閉症の原因	138 85	▽ ▲ 61.9%	197 26	▲ ▽ 88.3%
11) 発達障害と犯罪	141 82	▽ ▲ 63.2%	161 62	▲ ▽ 72.2%
12) アスペルガー症候群と社会性	185 38	▽ ▲ 83.0%	172 50	▲ ▽ 77.5%
13) ADHDの症状	194 29	▽ ▲ 87.0%	209 14	▲ ▽ 93.7%
14) LDと身体運動	168 55	▽ ▲ 75.3%	153 70	▲ ▽ 76.2%
15) 発達障害の本人自覚	89 134	▽ ▲ 39.9%	174 49	▲ ▽ 78.0%
16) 自閉症と知的障害	125 98	▽ ▲ 56.1%	150 73	▲ ▽ 67.3%
17) LDの原因	162 61	▽ ▲ 72.6%	170 53	▲ ▽ 76.2%
18) ADHDの行動の原因	171 52	▽ ▲ 76.7%	174 49	▲ ▽ 78.0%
19) LDの定義	189 34	▽ ▲ 84.8%	197 26	▲ ▽ 88.3%
20) 大人の発達障害	211 12	▽ ▲ 94.6%	214 9	▲ ▽ 96.0%

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, p<.05)

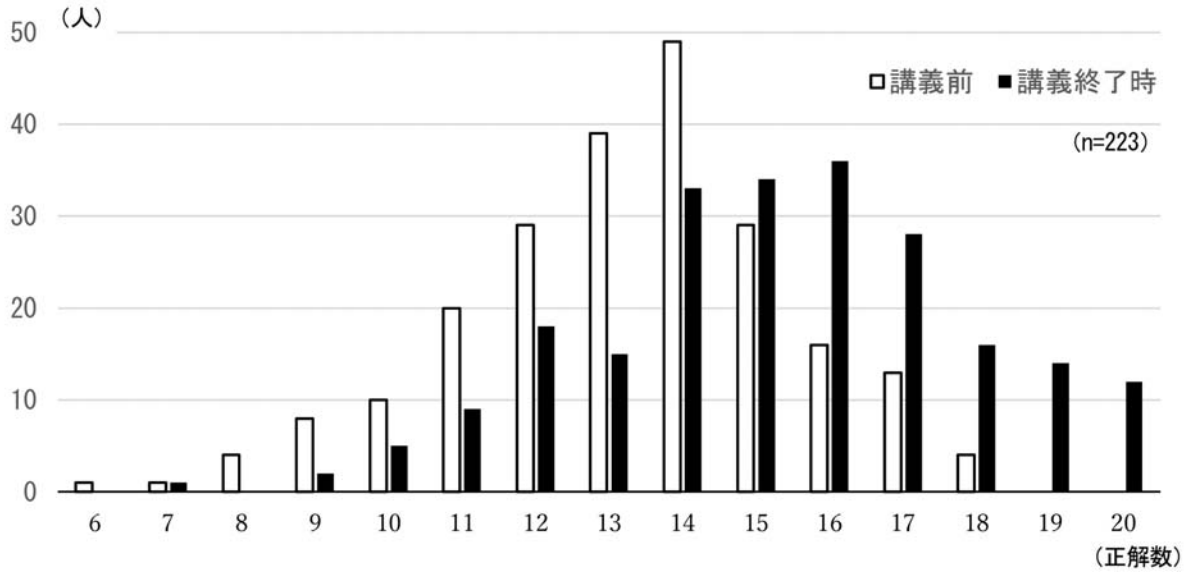


図1 特別支援教育の基礎 (初等) (教育学部対面講義)
受講者の講義前・終了時の発達障害に関する知識の正解数の変化

の正答数・誤答数について独立性の検定を行ったところ、2項目においてのみ有意差が見られた(表4)。

講義開始時の正答数が開始時の正答数に対して5%水準で有意に多いのは、「1)自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す(自閉症のコミュニケーション)」(講義終了時の正答率54.9%、開始時の36.6%に対して有意に多い)、「2) ADHD は、親の育て方など生後の環境により発症するものである(ADHDの原因)」(講義終了時の正答率

84.1%、開始時の69.5%に対して有意に多い)である。

IV. 考察

1. 講義開始前の発達障害に関する知識の比較

講義開始前アンケートの発達障害に関する知識・理解の項の平均点について、「特別支援教育の基礎(初等)」の受講生(M=13.28, SD=2.24)と「特別支援教育の基礎(中等)」の受講生(M=13.07, SD=2.20)に差は見られなかった。講

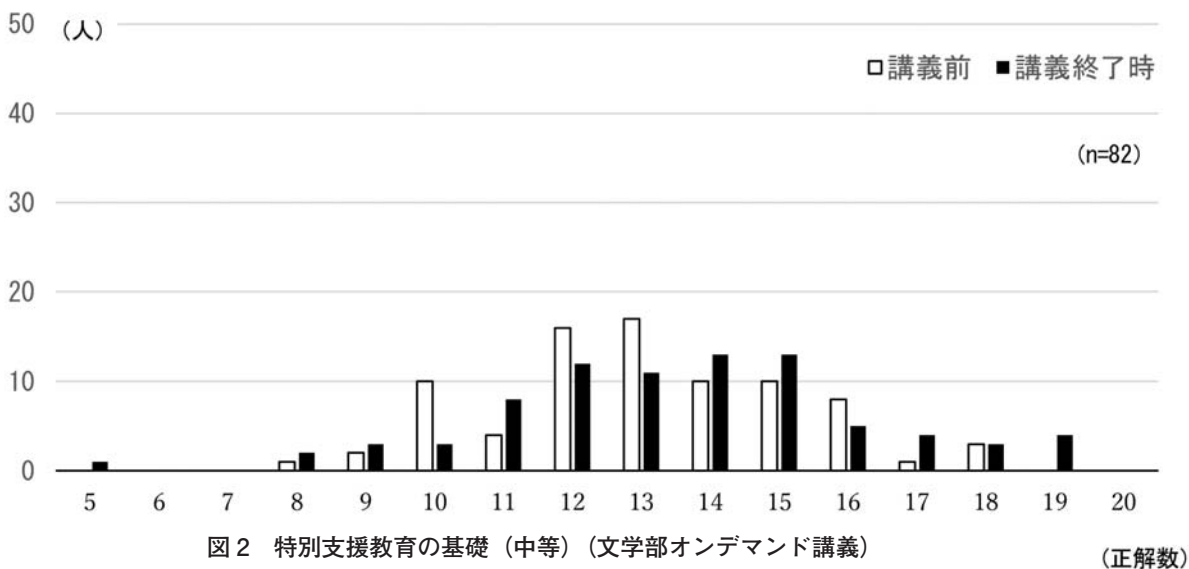


図2 特別支援教育の基礎 (中等) (文学部オンデマンド講義)
受講者の講義前・終了時の発達障害に関する知識の正解数の変化

義開始時点では教育学部2年生学生と文学部2年生学生の知識・理解には差がないと考えられる。これは両方の講義を受講した文学部2年生学生16名の講義開始時の得点の平均 (M = 13.25, SD = 2.65) も同様であった。

個別の設問では、「アスペルガー症候群の定義」において文学部2年生学生の正解率が39.0%、教育学部2年生の正解率が27.4%、「自閉症のコミュニケーション」において文学部2年生学生の正解率が48.8%、教育学部2年生の正解率が36.3%で、文学部2年生学生の得点が高かった。一方、「LDの定義」の1項目については、教育学部2年生の正解率が84.8%で、文学部2年生学生の正解率67.1%より高かった。

2. 講義終了時の発達障害に関する知識の定着

講義終了時のアンケートの発達障害に関する知識に関する調査では対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」の平均点 (M = 15.26, SD = 2.57) の方がオンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」の平均点 (M = 13.51, SD = 2.73) に対して有意に高かった。また、対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」の講義終了時の平均点が講義開始時の平均点に対して有意に高かったのに対して、オンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」の平均点は講義終了時と講義開始時とに有意な差は認めなかった。

度数分布図 (図1, 図2) では、対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」では全体的に得点の増加が見られたが、オンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」では個人差が大きく、16点以上の者があまり増えていなかった。

講義開始時のアンケート結果について、「特別支援教育の基礎(初等)」では第9回 (6月11日) の講義の中で、「特別支援教育の基礎(中等)」では第10回 (11月29日) の講義の中で集計結果の報告と解説を行っている。ここで誤答が多かった項目について解説しており、全員が正解を知る機会を設けている。また、各回の講義の中でもそれぞれの項目について解説している。

しかし、講義終了時のアンケート結果では正答数が増えなかった者が見られた。オンデマンド講

表5: オンデマンド授業開始前と終了時の文学部2年生学生の発達障害に関する知識の変化

	中等授業前 (秋学期・文学部)		中等授業後 (秋学期・文学部)	
	回答者数	正答数 誤答数	正答数 誤答数	正答率
20問中の正答数平均	82	13.07	82	13.51
SD		2.20		2.73
設問	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率
1) 自閉症のコミュニケーション	30 52	▽ ▲ 36.6%	45 37	▲ ▽ 54.9%
2) ADHDの原因	57 25	▽ ▲ 69.5%	69 13	▲ ▽ 84.1%
3) 発達障害の特徴	76 6	92.7%	77 5	93.9%
4) LDと知的障害	31 51	37.8%	41 41	50.0%
5) アスペルガー症候群の定義	32 50	39.0%	40 42	48.8%
6) ADHDと反社会的側面	68 14	82.9%	58 24	70.7%
7) 発達障害の特徴	71 11	86.6%	75 7	91.5%
8) 自閉症のコミュニケーション	40 42	48.8%	38 44	46.3%
9) ADHDの定義	59 23	72.0%	50 32	61.0%
10) 自閉症の原因	46 36	56.1%	50 32	61.0%
11) 発達障害と犯罪	55 27	67.1%	51 31	62.2%
12) アスペルガー症候群と社会性	70 12	85.4%	63 19	76.8%
13) ADHDの症状	72 10	87.8%	75 7	91.5%
14) LDと身体運動	61 21	74.4%	57 25	69.5%
15) 発達障害の本人自覚	43 39	52.4%	47 35	57.3%
16) 自閉症と知的障害	53 29	64.6%	62 20	75.6%
17) LDの原因	61 21	74.4%	55 27	67.1%
18) ADHDの行動の原因	57 25	69.5%	61 21	74.4%
19) LDの定義	55 27	67.1%	61 21	74.4%
20) 大人の発達障害	78 4	95.1%	81 2	97.6%

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, p<.05)

義「特別支援教育の基礎(中等)」では講義開始時と終了時の平均点に有意な差が見られなかった。前稿「大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(2)－対面授業とオンデマンド授業の比較－」(大杉,2021)ではオンデマンド講義も一定の学力が身につけられることを示したが、「発達障害とは」とか「自閉症とは」とか「LDとは」といった全体をとらえるような知識・理解を深めることは難しかったと考えられる。これは、対面講義をもとにして作成したオンデマンド講義では、ドリル的な知識は保障できるが、アクティブラーニングを通してその人の考え方、特にイメージとしてとらえているものについてお互いの差を指摘しあったり、間違いの修正を促しあったりするような機会を設けることが難しいためではないかと考えられる。

V. おわりに

本稿は令和2年の新型コロナウイルス(COVID-19)流行防止のためオンデマンド型授業を継続することとなった文学部2年生の教職講義「特別支援教育の基礎(中等)」と三密を避け記念講堂で実施することとなった「特別支援教育の基礎(初等)」について、講義の品質について検証を行った授業改善研究である。オンデマンド講義では知識は担保できるが、主体的・対話的で深い学びの実施が困難であり、その人のものの捉え方や考え方を変えることはまだまだ難しいことが示唆された。

もちろん、さらなる講義の工夫によって、オンデマンド講義でも改善が可能であると考えられる。

昨年に引き続き、視線入力により文書作成して人工音声を発するALS当事者の三保浩一郎氏の記念講堂におけるリアルタイム遠隔講義は好評を博した。オンデマンド講義では、ゲストスピーカーの医療少年院の守谷法務教官、通級指導教室のある高等学校の辻教頭には講義後の受講者レポートにも丁寧な返答をいただき好評を博した。こういった工夫を加えてオンデマンド講義の品質

を高めていく必要がある。

オンデマンド講義作成・配信にあたって、実は授業者は対面授業と比べて多大な時間と労力を注いでいる。しかし、本稿では、オンデマンド講義において対面授業と同様の品質を保つこと、とりわけ知識ではなく受講者のものの捉え方や考え方を変えることは難しいことを示した。学生も対面授業を希望しており、早く従来の授業が行えることを切望するものである。

謝辞

記念講堂での対面講義「特別支援教育の基礎(初等)」, オンデマンド講義「特別支援教育の基礎(中等)」の実施・運営にあたっては、皇學館大学教育開発センターや学生支援部教務担当の皆様のご多大なご支援ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

また、アンケートにご回答いただいた受講者の皆様に厚く御礼申し上げます。ここで得られた知見を生かして今後もさらなる講義の品質向上に努めたいと思います。

参考文献

- ・教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令(平成29年文部科学省令第41号), 平成29年11月17日, 2017.
- ・菊地哲平, 教育学部学生における発達障害のイメージ, 接触経験・知識との関連, 熊本大学教育実践研究, 28, 57-63, 2011.
- ・大杉成喜, 大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1)－教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して－, 皇學館大学教育学部学術研究論集, 2, 13-24, 2020.
- ・大杉成喜, 大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(2)－対面授業とオンデマンド授業の比較－, 皇學館大学教育学部学術研究論集, 3, 1-10, 2021.

Status Quo of Knowledge and Understanding of College Students Regarding Special Support Education (3): Comparison of in-Person and on-Demand Classes

OSUGI Nariki

Abstract: Almost all Japanese universities provided both in-person and online classes in order to prevent the spread of COVID-19 in 2021. Kogakkan University provided in-person classes in the auditorium or on-demand classes via the Internet. “Essentials of Special Support Education (Elementary Schools)” class in the Education Department, which this author taught implemented in-person mode in the auditorium, and “Essentials of Special Support Education (Secondary and Hight Schools)” class in the Letters and Science Department implemented on-demand mode. This author conducted questionnaires about knowledge and understanding of developmental disabilities for the students. In the questionnaire at the beginning of the class, the average score of in-person class was M 13.28 and SD 2.24. And the average score of on-demand class was M 13.07 and SD 2.20. There was no statistical difference between both classes. However, at the end of the lecture, the average score of the on-demand class was M 13.51, SD 2.73. Compared with the in-person class of M 15.26, SD 2.57, they showed significant difference. It was indicated that on-demand class is unlikely to change students’ understanding of developmental disabilities.

Keyword : *Special Support Education / in-person classes / on-demand classes / COVID-19*